

永野のり子は今回、11点の作品を発表した。素材はどれも雲肌麻紙にアクリル・岩絵具・透明水彩である。永野の世界観は作品の大小を問わず、一貫している。それはタイトルの《beyond the time》、「時間を越えて」が示すとおり、何時何処の世界観を乗り越えて、普遍的な印象を描き出そうとしているように思える。

画面に青と白の世界観が広がる。永野は特定の解説を施している訳ではないので、作品を端的に空と海、雲と雨といった具体的な主題に感じることは、決して間違いではないだろう。見る者の自由である。しかし作品名を考慮に入れ、連なる作品を注意深く見ていくと、それはある特定の時代や地域を描いたのではないことが理解できる。そして具体的な事項を抽象化したのではないことも、判明していく。すると永野の作品は「時間を越える」のではなく、「時間に左右されない=失われていく」のではないかと憶測することが可能となるのだ。そうすると、「普遍」という語彙も不確かになっていく。

時間が無い=含まない作品など、存在が可能なのだろうか。それは絵画であることによって、不可能が可能となる。芸術の最大の特徴とは、字面、画面、立体、映像、聴覚としての音楽であっても、そこに立ち現れるものは総て現実と化するのだ。芸術と反比例するのが広告である。テレビ、新聞、ラジオ、インターネット上に現実でも喩え芸術であっても広告として存在するのであれば、総てのリアリティが剥奪される。現実を虚構化するのが広告の仕事だ。永野が芸術の世界で現実だとすれば、総てが実現するのである。

雲肌麻紙に岩絵具といえば日本画の領域を思い起こすが、永野の作品には日本画的な感覚が全くなく、それどころか素材といったものを使用していないのではないかという程に、現世を感じさせない。それは1996年に北京・中央美術学院に留学、李行簡教授に水墨画を師事したことに由来するのかもしれない。日本に水墨画専攻はない。中国の水墨画が即ち常世を形成するとは考えにくい、いずれにせよ常世を描く技巧が永野の作品から時間概念を打ち消すことに違いはないことを私は確信している。永野には雲より大きい作品を描いて欲しいことを私は期待している。

